

考えて・歩いて・考えて

海外の旅で
いりかえる日本

葉山
茂



DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
nonfiction

大日本ジュニア・ブックス〈ノンフィクション〉

考えて・歩いて・考えて——海外の旅で
ふりかえる日本

著者 はやま しげる
葉山 茂

発行者 佐久間裕三

発行所 大日本図書株式会社

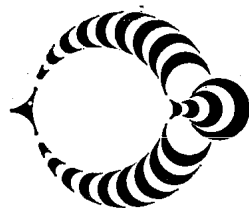
104 東京都中央区銀座 1-9-10

電話 (03) 561-8671~9

振替 東京 219 番

印刷所 株式会社 金羊社

製本所 株式会社 宮田製本所



8336-217610-4398

NDC 360

はやま しげる
葉山 茂

大日本図書 昭和49(1974)
149 P. 22cm (大日本ジュ
ニア・ブックス〈ノンフィ
クション〉)

1974年 5月15日 第1刷発行

著者略歴

東京大学文学部卒業。文学博士。東京大学教授を昭和46年停年退職。現在、成城大学
文芸学部教授。おもな著書に『ことばの本性』(法政大学出版局)『ラフカディオ・ハーン
の日本観』(勤草書房)などがある。また、最近の論文に「英国人の日本観」「敬語の社
会心理」がある。日本社会心理学会理事長をつとめ、現在、同会理事。
現住所：東京都中野区南台 2-51-9

もし乱丁・落丁の本がお手もとに届きましたら、お手数でもご返送ください。取り替えさせていただきます。

考えて・歩いて・考えて

海外の旅でふりかえる日本

葉山 茂

DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
nonfiction

大日本図書



はじめに

医学は病人を治すためにあり、農学は農業の振興のためにあるというように、たくさんある学問の中にはだれの目にも目的がはっきりしているものがあります。また、そういう学問の発達に役立つための他の学問がたくさんあります。こうして直接・間接の差はありますが、けっきょくは、学問はみな人間に役立つためにあるのです。

人間に役立つ学問といっても、人間には、世界に不可解なもののはのこしたくない、いわば何でも知りたいという欲求があるもので、その欲求を満たすために現れた哲学のような学問も人間に役立つ学問といえるでしょう。けれども、ふつう、役に立つといえは実生活に有用なことをさすのでしょうから、そういう有用についての理解からしますと、哲学などは有用でない学問といえるのかもしれませんが。

こういうようにさまざまな学問があるわけですが、もちろん、なんらかの意味で人間にとって有用でない学問はないのです。しかし、実際に

は「あなたのいまの研究は何の役に立つのですか。」と問われて、わかりやすい答えがすぐには出てこない場合もあるかと思いますが。もしも自身がそういう問いをうけたときに何と答えたらよいかと考えてみますと、やっている研究の領域（文化心理学にぞくします）がいくつかありますが、やはりけつきよくは、人間とはどういうものか、人間ののぞましい状態はどういう状態であるのか、そういう状態に対して現実の社会はどうなのか、というようなことを知ろうとしているのだということになると思います。簡単にいえば、現実の日本のこの社会の中でどのようなのぞましい人間と生活がありうるのかをはっきりさせたいということだと思います。

少し口はばつたいいい方ですが、やはりこういうことが研究者としての私の心の底に磁石のようににはまりこんでいるのです。ですから、この本でとりあげたほとんどのことがらは、私の内部のこの磁石によって旅行の先ざきで吸いよせられたものということができるとしよう。果たしてみな共鳴していただける見解かどうかはわかりませんが、書いてみました。読まれる方のためになることをねがいながら。

考えて・歩いて・考えて

■海外の旅でふりかえる日本

もくじ

*はじめに・3

／1／佐渡さどの杉田すぎたさん・9

―創意そういと協力きょうりよくの人―

／2／ある校長先生けいちょうせんせい・16

―ほんとうに子どもを思う人―

／3／むかしの調査地ちやうさちを訪ねてたず・20

／4／ニューデリーの靴くつみがきの少年・26

／5／ハリムとハルン・29

／6／シンガボールのタンさん・36

／7／シンガボールの受難碑じゆなんひ・44

／8／ペナン島の人力車夫じんりきしやふ・51

／9／ペナン島の豪州人夫妻ごうしゆうじんふさい・57

／10／エディンバラのグラントさん・62

／11／ドーバー海峡かいきやうのある町で・68

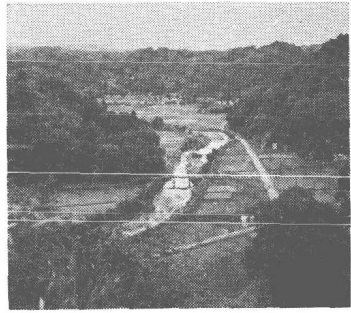
／12／ケンジントン・ガーデンのハト・74



- 13 / ヨーロッパの古い建築・77
 14 / 国際感覚・85
 15 / エルベ川の名所シユラウ・89
 16 / おしですますより日本語を・92
 17 / 仕事と趣味・98
 18 / 季節感・104
 19 / アナウンスの多い日本・110
 20 / 夏の夜にハーンを思う・119
 21 / 「礼儀を重んずる日本人」・124
 — アダムスはこう言った —
 22 / 「礼儀を重んずる日本人」・132
 — オールコックはこれについて考えた —
 25 / 自転車を修理する人・138
 * あとがきにかえて・143

装幀・カット

月田孝吉



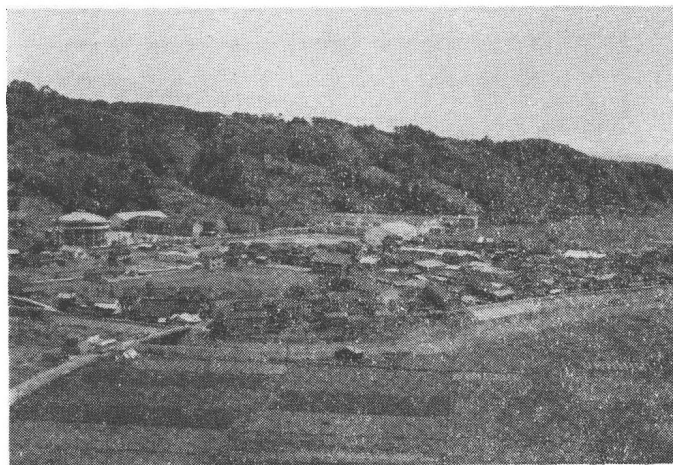
／ Ⅰ ／ 佐渡の杉田さん

—— 創意と協力の人

佐渡は大佐渡と小佐渡に分かれます。中央部のくざれたところを境にして北部が大佐渡、南部が小佐渡です。小佐渡をずっとくざれてくると小木町に達します。娘さんたちが大きなたらい舟で観光客を送り迎えるので有名な港町です。江戸時代に日本海を往来する千石船が寄ったところとしても知られています。その町から北へ少しもどったところに羽茂という村がありました。話は昭和三十四年、五年のころにもどります。

寺や神社がたくさんあって、広いたんぼがあつて、まわりは小高い山をめぐらした細長い村です。中央本通りは店がならんでいましたが、しかし、むかしのほうがずっとにぎやかだったろうという感じがしました。北のたんぼのつきるところに古びたかなりりっぱな神社があります。佐渡一の宮といわれています。その近くは山で、山のほうにあがって行くとまだ二つの部落があり

写真＝羽茂川の上流地域



羽茂町の中心部

ます。海岸からここまでをふくめた羽茂村はほんとに長い村で、その中央をまがりくねりながら羽茂川が流れています。その川ではアユがとれます。

川が海にはいるあたりの右左は大小の味噌工場がたちならんでいて、工業地帯をなしています。この村には県立高校さえあり、いわば開けた村です。この村は農耕を主とした部分、商業中心の部分、工業地区の三つにわかれるといつてよいでしょう。

中心の商業地区を通る川にそって少しくだると

右側のやや高いところに十二、三軒からなる小さい

部落があります。ここにかつてひとりの篤農家がい

ました。かれは柿の栽培をはじめたらきつと結果が

よいはずだと考えて、その考えを自分で実行しまし

た。そしてそれがおどろくべき今日の柿生産を導いてきたのです。それで、その人を先覚者と呼びましょう。

ところが、こういつてしまうと簡単にきこえますが、部落全体がいつしよになって柿の栽培を

はじめるようになるまでには時間がかかったのです。新しい冒険的な仕事にはおいそれと人はついてくるものではありません。ここでも同じことで、おおいにこの人が説いても部落の人たちは、先祖代々の畑の耕作のしかたを変えることはできないのです。しかたがないから、この人は自分だけで柿の栽培をはじめました。柿の栽培といっても最初から若木を植えたのではなく、これまであった古い柿の木を台木にして、はかの柿の産地からよい柿の接木を持ってきてついだのです。

果樹が実をつけるようになるまでには年数がかかりますから、となりの人たちを説得するやり方としては気長なものです。部落の人たちがついてこなければこの人の夢想する柿の生産の時代を迎えることはできないのですから、かれは気長な説得の方法をとらざるを得なかったわけです。

やがてりっぱな柿の実がなるようになりました。それを目で見た人びとは、動き始めました。われもわれもと接木をはじめました。これを見た先覚者はどんなに喜んだことでしょう。私が行ってこういう話をききましたのは、昭和三十四年のことで、そのときにはこの先覚者はもう生きていませんでした。その息子と幾人かの部落の人たちから、すでに八珍柿（今は佐渡柿といえます）として荷出しをはじめるまでになったいきさつをくわしくききました。それは長い年月にわたる部落の人たちの協力のたまものだったのです。

その中でめばしいものをあげますと、まず道づくりでした。ブルドーザーなどの新鋭機を使うのではありません。クワとモッコとリヤカーでの道づくりで、よほどつらい仕事だったらしく、感にたえない顔をしてその人たちが私に話したのを今もはっきりおぼえています。

協力作業がたえずあるため生活時間のとりきめをするのが必要であり、しかもそれが一仕事だったのです。めいめい勝手な時間の使い方ができなくなるのですから、それがどんなに勇気のあることであつたか想像できるでしょう。肥料づくりとその運搬、除虫作業も協力して行いました。

先覚者と私が呼んだ人がまだ生きていたときでしたが、この人がある日、小木町との境近くを道歩いていました。小木町の農業指導者の杉田という方と立ち話をしました。それ以来いくどかにわたって話をかわしているうちに、この人に指導してもらったら部落共同の柿の生産はもっとよくなるにちがいないと考えるようになりました。そして、いろいろ教えてもらっていることが機会になって、羽茂村はこの人を農業指導員として小木町からゆずりうけることに成功したのです。

柿の栽培を思いついたのがこの先覚者の大きな功績だったのですが、杉田さんを羽茂村に来てもらう機会をつくつたというのが、この人のいま一つの功績だったと思います。

杉田さんという人はひじょうに創造性の豊かな方で、自分がああしたらよいだろう、こうした

らよいにちがいないと、いつも考えながら仕事を気長な気持ちのうちにすすめていく人でした。

試験的に栽培して農業を改善していくというのは時間がかかることですし、気長に、しかしたゆまずやる人でないと、ほんとうによい農業指導者にはなれないと思います。そのことをよく心得て、この人に思うぞんぶんのことをやらせた村の人たちもえらかったと思います。

杉田さんを創造性の豊かな方であるといいましたが、そのことは、実地にその部落に設けられている柿栽培試験農場を訪れたらよくわかるのですが、一例をあげますと、昨年久しぶりに私は羽茂を訪れ、この試験農場に行きました。案内してくれたのは役場の方でした。ふと私は柿の木の根元近くの幹のまわりから地中に向かって幾本かの露出根のようなものが出ているのに気づきました。根にしては奇妙なものと思いながら、

「あれは根ですか。」

ときぎました。役場の人は、笑いながら、

「それがまた杉田さんの創作でしてね……。」

といって説明するのは、つぎのようなことでした。

「柿の木は高く伸びないように、横に広がるように育てているのですが、そのように育ててしまうと、風に弱くて、たおれやすいのです。風に強くするにはどうしたらよいか、それが杉田さんにとって一つの問題になったわけです。その結果がこれなんです。柿の木が接木しやすいのに

目をつけて、地面近くの幹に接木して反対の頭を土中に入れたのですね。それがみごとに成功して、これこのとおり、幹に密着した小枝は土中に根をはるようになったのです。」

この説明をきいて、私は腰をかがめて、本の柿の木の根元にさわりました。なるほど数本ついている支え木は、まさしく生命ある枝になっていて、それががっちり幹を風にゆるがないように支えているのです。見た目には露出した根のように見えるのですが、接木してそのようになつたときかされて、いまさらのように、着想の妙に感じりました。

先にかきましたように、昭和三十四年にはすでに八珍柿としてこの部落から出荷され、柿栽培は主としてそこに限られていて、ほかの部落に波及しかけているのが観察されただけでした。ところが、昨年の訪問のときに私は、柿の栽培がいくつもの部落で行われ、山から山へと広大な範囲にわたって、青い実をつけた柿の木が植えられているのをながめて、全く感激しました。

杉田さんにはこのとき会えませんでした。以前に会ったときの杉田さんについて少しのべますと、いつも戸外で働くかれは赤銅色をして、つやつやとつやのある顔は、よくつば広の麦わら帽子の下にかくれていました。「こんにちは」と声をかけると「だれか。」という目をしてこちらを見ます。少し鋭い目。つぎの瞬間、やはりきつい顔です。帽子をぬぐと短く刈った頭が丸い。またいいですが、全体としてつややかな人。話し出すと力強い話し方。これがいまに私の頭にのこっているかれの印象です。

戦争中、杉田さんにも召集令状がきました。いつものように村人は出征兵士を送るのです。杉田さんを見送る人の列は長い長い列だったそうです。それが特別に多い人出だったようで、そのときのことを話してくれた人がありました。

羽茂村は昭和三十六年四月に町になりました。村の時代から高校があり、銀行があり、神社・仏寺が多く、そこで村人の子弟の教育は明治以前からずっとつづいていたし、流人による文化の移入があつたりして、とても開けた町という感じがしました。右のようなむかしの事情があつたり味噌工場があつたりして村は発展をつづけてきています。そういう発展の、ことに戦後の発展の流れを押し進めるのに、杉田さんや、さかのぼってはあの先覚者の知恵と実行力が果たした役割は大きかったと思います。生涯を託しての貢献者といつてもよい杉田さんに、たえず感謝の心を表しているかのように、町は役場のとなりに住宅を提供しています。村長や町長がどんなに交替しても、かれはいつも同じ住宅に住んでいます。

全体として日本人は外国のものの受容に熱心ですから、私が先覚者と呼んだ人や杉田さんは特別な日本人といえるでしょう。こういう創意工夫の人がふえていくことがどれだけ日本をよくしていくかしないと思うのです。